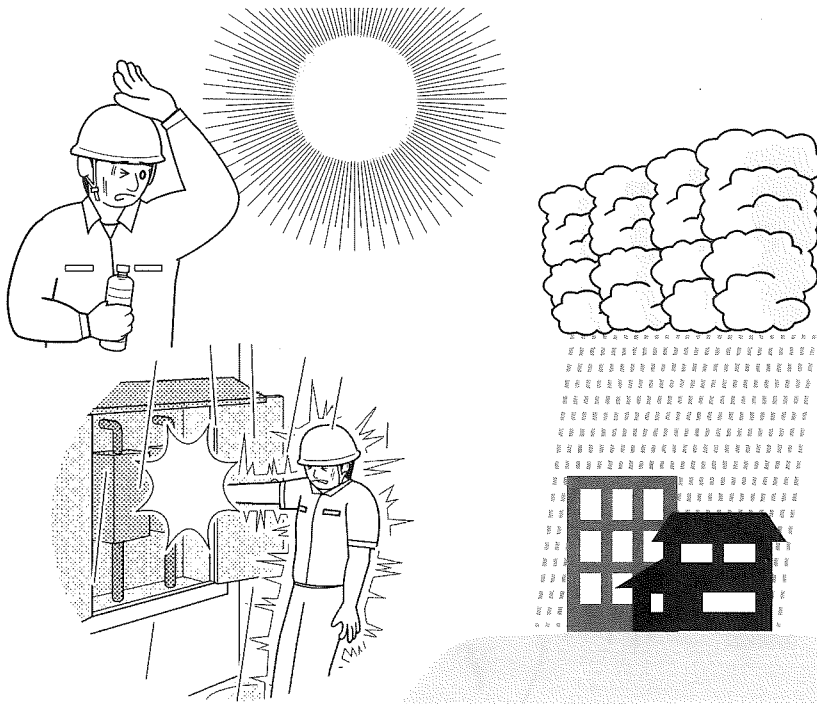


7月の安全・衛生・防災の管理・活動

— 高温・多湿でのトラブル対策を人も設備も —



本年も7月1日～7日は「全国安全週間」です。昭和3年より「人命尊重」という基本理念の下、取り組まれていきます。またこの時期は、高温多湿による心身の疲労や体調不良、機械や設備のトラブルで事故になるリスクも高まります。

次の事項の取り組みと共有化が必要です。

安全管理・活動では

- ① 作業行動に注意 心身の疲労で注意力が散漫になり「うっかりミス」を起こしやすい。安全確認は確実に行い作業手順等は必ず遵守。
 - ② 感電事故・災害に注意 高温・多湿で電気・機械設備の絶縁劣化、作業者の発汗や軽装・肌露出で感電しやすい。
 - ③ ヤケドや薬傷に注意 軽装のため肌の露出が多く負傷しやすく、受傷も重度になりやすい。
 - ④ 危険・有害なガスや蒸気が発散・漏洩 特に高圧ガスは要注意。安全措置の実施を。
 - ⑤ 集中豪雨など大雨対策 急な雨風による作業環境の悪化や作業現場の地盤の軟弱化など、事前に対応策を再度確認し、職場で共有化を。
- ☀ **衛生・健康管理では**
- ① 熱中症に注意 暑さ指数(WBGT)も活用し業務内容の管理。適切な睡眠・食事をとり体調維持を。
 - ② 食中毒に注意 高温多湿は食中毒菌が増殖しやすい環境。手洗い・衛生管理の徹底を。

「非定常作業」の準備を大切に

いざという時のために…

いざという時のために、
リスクを出し合い、
対策を共有化しましょう



夏季は交代で休暇取得もあり、自分の担当ではない作業を行う場面があります。特に新任者、異動者にとっては初めての作業もあります。保守点検作業やトラブル対応などの「非定常作業」についても漏れなく周知することが大切です。

【多くの労働災害が「非定常作業」で発生】

- ・ 日常的に反復・継続し行われることが少ない。
- ・ 十分な時間的余裕がなく行われる場合が多い。
- ・ 設備及び管理面の事前検討が十分行われない。
- ・ 作業者が習熟する機会が少ない。

【突発的な非定常作業（トラブル対応等）では】
非定常作業のため手順書がない、読んだことがない。

- ・ 瞬時の判断を求められる場面が多い。
- ・ 休日や夜間の非定常作業の場合、管理者に確認ができない。

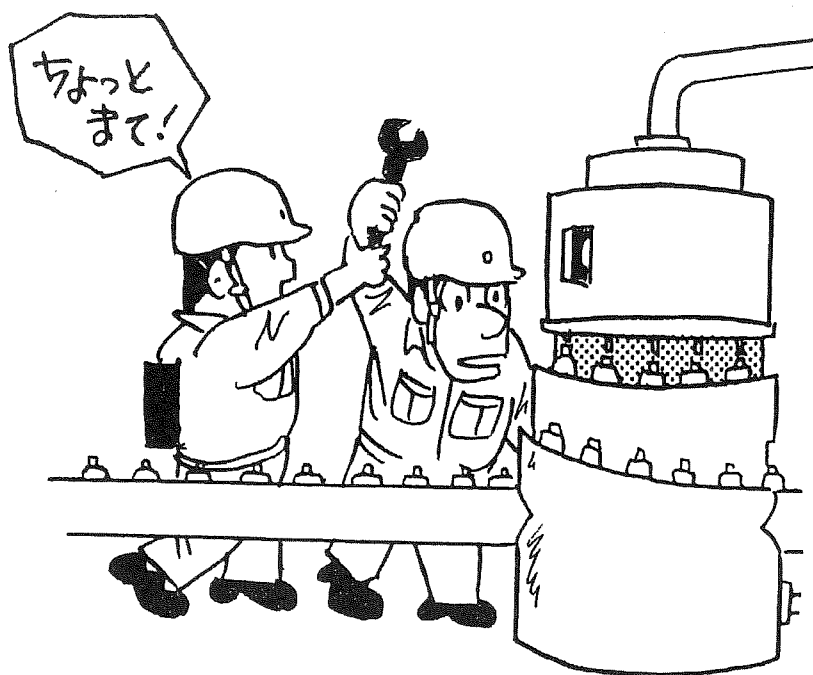
【非定常作業の安全管理】

- ・ 各手順書の作成や過去の事故事例の共有化と教育・訓練の実施
- ・ リスクアセスメントと作業当日のツールボックスミーティングでの確認
- ・ 手順書にない想定外の事象については、自己判断せず、必ず管理者や作業を熟知した職員へ相談する、等。

非定常作業においても、各作業の目的を理解し、緊急時にも周囲の同僚と連携し、確実に安全最優先で対応することが重要です。

不注意・ミスをしてはいけない、させない

……不注意・ミスの原因と対策……

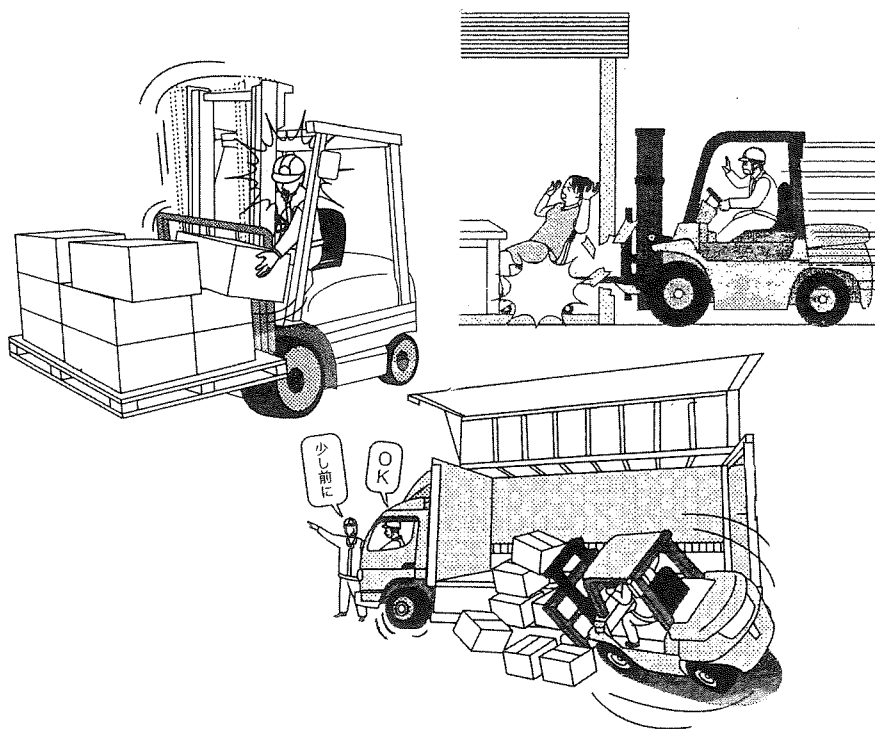


7月1日からは「全国安全週間」ですが、7月に安全週間が設けられたのは、この時期は暑さや体調不良で不注意やミスが多くなり、事故や災害を起こしやすいからとされています。また近年、多くの職場では労働時間の規制や人手不足で、次のような不注意やミスが発生しがちです。

- ▼多忙ミス 作業量の増大につれて、手順の省略や誤りが多くなる。
 - ▼懸命ミス 機械を停止させると他の工程に迷惑がかかるからと、「懸命な思い」から作業を続けて事故を起こしてしまう。
 - ▼焦燥(しょうそう)ミス 「急ぐ心」、「せっかち」の心理状態。日本人に多いと言われている。
 - ▼放心ミス 心身が非常に疲労しているとき、考え事をしていているときなど。
 - ▼確信ミス 慣れた作業を実施しているとき、ある時点のミスで誤った方向に向かっているにもかかわらず、間違いを疑わない状態。
 - ▼無知ミス 教えられていない、経験したことがない事象で対応を誤る、など。
- このようなミスは私たちの作業の中で日常的に起きる可能性があります。このようなミスがあっても事故や災害に結びつかないような安全対策を講じることが肝要です。
- そして私たち自身も、「指差し呼称」などで注意力を呼び覚まして行動することが必要です。

フォークリフト作業の安全心得

事故の8割を占めるワースト3



フォークリフトに関係する死傷事故の発生件数は、22年は2092件(死者34人)となり、前年より64件増加しています。

フォークリフト災害のワースト3は、「挟まれ・巻き込まれ」、「激突され」、「墜落・転落」で、全災害の約8割を占めています。

▼約37%を占める「挟まれ・巻き込まれ」はマストと車両間で誤った荷役操作や、パーキングブレーキのかけ忘れによる車両への接近などによるのが原因です。オペレーターが正しい操作位置にいない場合に誤操作事故を未然に防止する対策が必要です。

▼約30%を占める「激突され」災害では、歩行者の接近見落とし、後進時の歩行者見落としが主な原因です。対策として、回転灯など周辺作業者への車両接近を報知するほか、激突回避支援ブレーキなどの対策が必要です。

▼約13%を占める「墜落・転落」は、プラットフォームから転落するケースが多く、走行時は端部から十分に距離をとるなどの対策が必要です。

こうした事故原因は、運転操作ミスや安全確認不足とともに、人の昇降やけん引など、禁止事項である「用途外使用」でも多発しています。

特にフォークリフト作業が混在する作業場では、オペレーターや周囲の作業者のさらなる安全意識と安全行動の向上が求められます。